琉球新報 2012年5月26日(土)

高校生提言、思い一つ

太平洋・島サミット

「世界少しでも変える」

「私たちは全ての人々が安全できれいな飲み水を手に入れる世界を心に描く。そこでは母なる自然が、人間から負の影響を受けずに栄えている」。25日に宮古島市のマティダ市民劇場で行われた高校生太平洋・島サミットの提言式で、真摯(しんし)な思いが込められた提言が読み上げられると、会場中に大きな拍手が湧き起こった。水を守るために高校生が各国首脳に提言するという初めての試みは、大成功を収めた。提言を受けて宮古島を後にした各国首脳は、26日に名護市で行われる首脳会談に臨む。

提言書を受け取り、高校生と握手する各国の首脳ら＝25日午後、宮古島市のマティダ市民劇場

提言は、すんなりとまとまったわけではない。各国の高校生たちが挙げた国ごとの課題や政府に求める対策は膨大な量になり、提言書がまとめられたのは25日午前3時を過ぎた。それでも高校生たちは妥協せず、提言には各国政府への要求だけでなく、自分たちが今後実行すべきことも盛り込み、環境保全への責任感を示した。

真剣な訴えは、各国首脳の心を打った。提言を渡す際に、多くの首脳が笑顔で高校生と握手した。

サモアのトゥイラエパ首相から、サモア語で「良くやった」という意味の「マーロー」と声を掛けられたジェラード・アナプ君(17)は「まさかそんな言葉を掛けてもらえるとは思わなかった。とても幸せ」と感激した。

提言式の後、舞台上で踊った高校生たち。一つの大きな目標を達成し、晴れ晴れとした表情で交流を楽しんだ。島根県の松江北高3年の大谷慧君(17)は「みんなで話し合って、素晴らしい提言ができた。自分たちが考えたことで、世界を少しでも変えることができたらと思うと、とても感慨深い」と達成感をにじませた。

(沖田有吾)